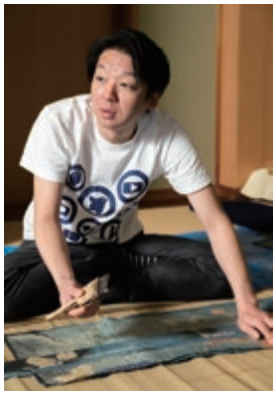
Contents

［特集］

京の夏しごと

旅人＝茂山逸平　構成・文＝安藤寿和子

16 清水さんの千日詣り
24 茂山家の土用干し
27 コラム ちょっと体験 夏しごと
29 「口福の涼味」あれこれ
36 京の夏しごと〔案内図〕



「装束の糊づけ」は、狂言師ならではの夏しごと。茂山逸平さんは慣れた手つきで肩衣に糊をあてていく
写真＝二村 海

40 ホンタビ！ 文＝川内有緒
早坂大輔著『コーヒーを、もう一杯』［岩手県盛岡市］

48 おいしいもんには理由がある 文＝土井善晴
磯香る夏ウニ［山口県萩市］

7 京都の路地 まわり道 文＝千 宗室
胡瓜

9 ひとときエッセイ「そして旅へ」 文＝川上和人
ネコの向こうで鳥が飛ぶ

11 古書もの語り 文＝内堀 弘
『宮澤賢治全集』

12 わたしの20代
由美かおる（俳優、歌手）

39 柳家喬太郎の旅メシ道中記
シンカンセン スゴイカタイアイス

45 地元にエール これ、いいね！
鋳物の町、高岡の風鈴［富山県高岡市］

54 旅するリラックマ
一乗谷朝倉氏遺跡復原町並内
和傘スカイ［福井市］

77 ホリホリの旅の絵日記 文・絵＝ほりのぶゆき
海洋博公園［沖縄県本部町］

56 旬 News & Topics
58 美 Art & Entertainment
60 遊 Event & Festival

62 旅の小箱 from JR東海、JR西日本
「あいち冷やし旅」キャンペーン
65 名古屋マリオットアソシアホテル
「都のかなで」コンサートご招待
67 世界遺産・姫路城の特別公開と
EVモビリティで行く！
「城崎ぷちたび」
68 倉敷市で歴史と名画に触れる
プレミアムなひとときを
69 夏へ一直線！ 冒険TRAIN
71 レインボーライン山頂公園で
若狭湾の夕景を堪能！
73

74 ひとときの倶楽部
読者からのお便り
今月のプレゼント など
76 次号のお知らせ
78 ルートマップ
東海道・山陽新幹線時刻表

8月1日に行われる芸舞妓さんの挨拶回り「八朔」は、京都の夏の風物詩。写真は宮川町のひとこま　写真＝中田 昭

は読者プレゼントがあるページです

※本誌に掲載している施設やイベント等の情報は2023年6月現在のものです。
お出かけの際は現地にお確かめください。また、価格のうち特に表記のないものは税込です

特集

京の夏しごと

うだる暑さの京の夏。
しかし油照りのこの町には
盛りの暑さと腕比べをするごとくの
挨拶ごとやら、行事やら
「夏のノルマ」があります。
暑さに負けそうな心を意地と矜持で吹き飛ばす
いわば、カンフル剤のような、夏しごと。
そして、ひとしごとを終えた心身への
至福のご褒美となる
美味、涼味もまた、あるのです。
そんな夏の京都の表と裏を
京都在住の人気狂言師、茂山逸平さんと探訪。
暑さの向こうにとっておきの楽しみの待つ
まだ見ぬ京都へ、ご一緒に。

旅人＝茂山逸平
Shigeyama Ippei

構成・文＝安藤寿和子
Ando Suwako

清水寺の北方にある「将軍塚」からは、京都の街の全景が見渡せる。夏の強い光線が、ぎらぎらと町を照らしていた一日、もうすぐ夕立がくるだろう　写真＝中田 昭

清水さんの千日詣り

暑さに負けず参詣した人だけが授かるのは、なんと千日ぶんの功徳。
京都といえばの名刹、清水寺の夏限定の「ご縁日」へ、いざ。

写真=伊藤 信
Ito Makoto

「清水さんは、三重塔落慶のご法要に親子三代（祖父の四世千作氏・父の二世七五三氏・逸平さん）で狂言を奉納させていただいたり、夏の暁天講座に招んでもらうことはあったけど、千日詣りは寄せてもろたことあったかなあ。いや、もしかしたら、そうとは知らずに来てるのかもしれんけど」

清水寺へ向かう参道、産寧坂の石段を登りつつ、ふと洩れた茂山逸平さんのひと言。そうとは知らずに……とは、いかにも京都の人らしい。何の気なしに親や祖父母に手を引かれ、門前の甘いものなどに釣られて知らず知らずお詣りしてご縁を結ぶ。この町にありがちな、子どもたちと神仏の和やかなコンタクト風景である。

狂言の舞台はじめ、NHKの朝ドラや語学講座などでも顔を知られる逸平さん。ごく小さい頃、朝ドラヒロインの弟役を演じた折の可愛らしい印象をいまだにお持ちの方も多いようで、すでに不惑も越え、堂々の中堅どころとして活躍の今も、周りからの呼び名は相変わらず「逸平ちゃん」。

日暮れ間近、まだまだ人の絶えない道々での視線や声かけもさらりと受けて、目指すは音羽山清水寺の正門。なだらかに峰を連ねる東山のふもと、坂の続く参詣道は、振り返ると眼下に京の市中が見え隠れ。門前の賑わいを楽しみながら、けっこう登ってきているのである。

源氏物語にも描かれる灯明

古来、「千」という字は「たくさん」の意味。計り知れない無数無量をあらわすものとして、寺社には雨風を厭わず千日を通い詰めて満願をねがう「千度参り」「千度詣で」の信仰があった。

なかでも観音信仰の聖地と知られる清水寺の千度参りは、その霊験ひときわと、出世前の平清盛も願を立てたとか。そんな千度のお詣りの功徳を、たった1日でいただける機会がある、となれば、見逃す手はなかろう。

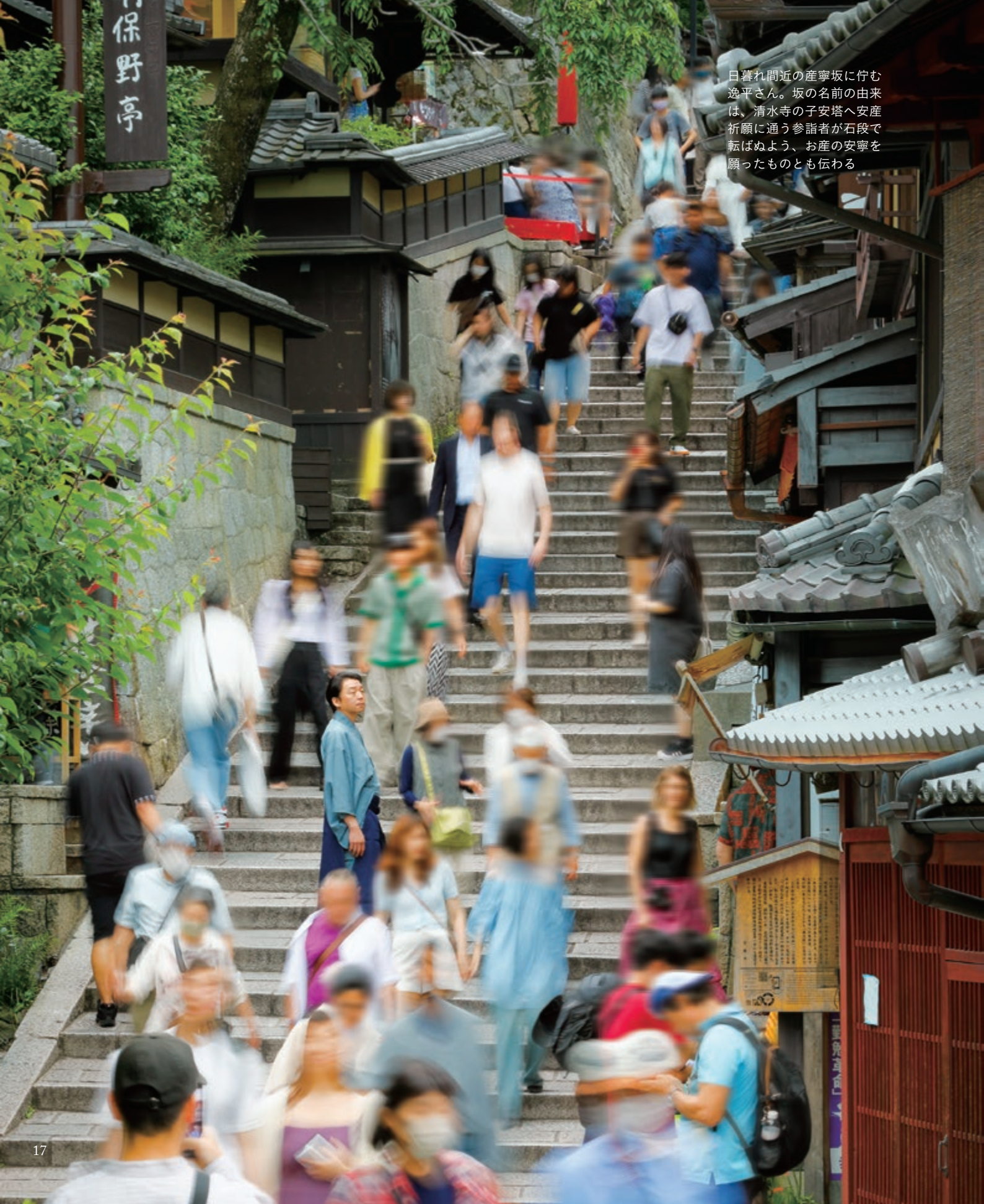
清水さんの千日詣りは8月9日から16日まで。もともと旧暦7月10日が大功徳日とされ賑わったそうだが、明治以降、暦が改まるなどして、今の日取りに。とりわけ夜間の拝観ができる14日からの3日間は、お詣りの人の献じる灯明が、ほの暗い内々陣に揺れるさまも美しく、かつて紫式部が『源氏物語』に記した「清水のかたぞ光多く見え人のけはひもしげかりける」との様子も彷彿させる。

「狂言にはお寺が出てくる話も多いですが、そのお寺というのが、ほぼ清水寺か因幡堂*。だいたいそのふたつに相

旅人 茂山逸平さん

大蔵流狂言師。1979年生まれ。茂山千五郎家一門の中核として「花形狂言少年隊」「TOPPA！」など結成。広い層に向けた舞台やNHK連続テレビ小説「京、ふたり」「オードリー」等の出演、他ジャンルとのコラボ公演など多彩な活動で人気を博す。新進芸術家海外派遣制度でフランスにも留学。

＊平等寺の別名。下京区にある



日暮れ間近の産寧坂に佇む逸平さん。坂の名前の由来は、清水寺の子安塔へ安産祈願に通う参詣者が石段で転ばぬよう、お産の安寧を願ったものとも伝わる

写真=二村 海
Nimura Kai

者ども
かかれい！

茂山家の土用干し

盛りの暑さの中でしか成し得ない
「夏しごと」の代表格、茂山家総出の
装束の糊づけ、面の虫干しを、ちょこっと拝見。

7月末から8月前半にかけて、暑さもピークを迎える夏の土用に衣類や書物を陰干しして湿気を飛ばし、カビなどを防ぐメンテナンスは、以前は普通の家でもよく見かけた夏の風物詩的作業であった。

空調も整い「土用干し」と言えば梅干しくらいしか思い浮かばない昨今。しかし狂言の茂山家では、この時期、若手役者が集まって、のべ10日間ほど、「麻装束の糊づけ」と「面の虫干し」を行うのが恒例。その作業風景を逸平さんの案内で覗かせていただいた。

能、狂言の家では、面はもとより、装束や小道具類も自前。舞台で必要なもののほとんどを所有し、着付けも手入れも自分たちで行うのである。

糸、針三年、糊五年

まず「糊づけ」から。作業拝見の前に、ちょっと狂言の舞台を思い描いてみよう。そこには大名、太郎冠者、僧侶、山伏など、さまざまな格好の人たちが出てくる。それら登場人物が着ている装束のいちばん外側、たとえば裃のように肩のあたりがピンと張った上着「肩衣」や、袖のたっぷりした「素袍」、そして長短の「袴」等々、それらは大概、麻で仕立てられている。その麻装束が舞台で使ううちに、草臥れたり皺になったり。逸平さんいわく「ヘニャヘニャになってきたものを、糊をあて直してシャキッとさせる」のが、「糊づけ」の作業である。

「姫のり」と呼ばれる着物用の糊を、水で緩めて、装束に刷毛でシャーッと。一見、簡単に見えるが、糊の具合、力の加減、さらにピンと張らせたいところは濃いめに、着たら見えないところは生地への負担が極力少ないよう薄めに、など工夫のしどころは一様でない。さらに糊をあてる人、装束を着ける人、それぞれの好みもあり、同じ肩衣でも

慣れた手つきで肩衣に糊をあてる逸平さん。お上手！

「口福の涼味」あれこれ

とにかく暑い夏の京都。
その中で「夏しごと」を終えた
心身へ、ご褒美の〝口福〟を。
生粋の京男4人の座談、
放談でご案内しましょう。

写真=伊藤 信
Ito Makoto

冷たく心地よい歯応えのじゅんさいを、アンティークのグラスに。天盛りはトマトのジュレ。山葵〈わさび〉の香りもキリッと、五感に涼しい一品。「なかー」にて

た。上品な甘さで、爽やかで、あれはおっさんも喜ぶかき氷（笑）。でも、「桂うり」て珍しいね。

中村　土地のもので、うちにしかないものができないかなと。「桂うり」は昔ながらの品種で、かけ合わせて病気に強く、みたいなことはないので農家さんにはなかなかつくってもらえない絶滅危惧種。今は、京都府立桂高等学校の生徒さんが、伝統野菜を守る目的で栽培してるのを使わせてもろてます。

茂山　貴重なもんなんや。

中村　見た目は地味ですけど、召し上がれば好きになってもらえるかな、と。

届けたい涼味

——自分へのご褒美のほかに、人に差し上げたい夏の味、もありますよね？

茂山　善也さん（鍵善）とこの竹筒の水羊羹（甘露竹・写真下）とか、まさにそうと違いますか？　うちでは親父がずっと、お寺へ挨拶に持って行ってました。

今西　自分用にはなかなか買わへんけど、他所へ持って行くのに買うお菓子て、あるね。寺町の村上開新堂さんの「オレンジゼリー」とか。

茂山　あれも美味しいね。善也さんとこの水羊羹はやっぱり竹の香りが清々（すがすが）しくていいですもんね。でも大変でし

祇園で三百余年。この土地に遊ぶ文人、粋客のセンスや要望に応える和菓子、ことに「くずきり」で名を馳せる。当代の今西善也さんは親子二代で祇園祭長刀鉾稚児もつとめ、他にも役職多数の“祇園の偉いさん”。「ZEN CAFE」や「ZENBI KAGIZEN ART MUSEUM」など和菓子とアートを楽しむ新店でも注目を集める

鍵善良房

◉

Kagizen yoshifusa

旅行鞄に、本を詰めて

ホンタビ!

第23回

文＝川内有緒 Kawauchi Ario
写真＝荒井孝治 Arai Koji

作家の川内有緒さんが、本に動かされて旅へ出る――。登場人物を思うのか、著者について考えるのか、それとも誰かに会ったり、何か食べたり、遊んだり？さて、今月はどこに行こう。本を旅する、本で旅する。

旅はコーヒーとともに（岩手県盛岡市）

喫茶店には魔力がある。ひとつは淹れたてのコーヒーという魔力、もうひとつはコーヒーを淹れるひとが放つ魔力だ。とりつかれた人たちは、喫茶店をめぐらずにいられなくなるとか。

明治期の建築「岩手銀行赤レンガ館」。盛岡ではこのほかにも明治・大正期の建築が今も文化施設として活用されている。市内にたくさんの喫茶店があるので、ひと休みしながら散策を楽しみたい

そんなことを普段から思うわりに、数年前、喫茶店がひとつもない街に住んでしまった。チェーンのコーヒー店はいくらでもあるのだけど、魔力のある店はひとつも存在しなかった。その街は電子音だけで構成された音楽みたいで、長く暮らすことは難しかった。あれから時が経ち、今は喫茶店が多い街に住んでいる。

盛岡市も喫茶店文化が花咲く街らしい。それを教えてくれたのは『コーヒーを、もう一杯』という本で、著者は

盛岡市民憩いの場所・クラムボン　1.優しい笑顔で迎えてくれる店主の高橋真菜さん。父・正明さんの遺志を継ぎ、店を切り盛りする　2.店内に飾られている正明さんによる猫の絵　3.淹れたてのコーヒーの豊かな香りに川内さんもにっこり　☎019-651-7207

今月の本

早坂大輔著『コーヒーを、もう一杯』（BOOKNERD刊）

盛岡市の書店「BOOKNERD」店主の早坂大輔さんが綴る、8軒の喫茶店にまつわるエッセイ集。「お客様からおすすめの喫茶店を聞かれることが多くて、まとめてみたんです」と早坂さんは語るが、単なるガイドブックではなく、盛岡の街に根差す喫茶店へ想いを寄せる一冊。オンラインストア（https://booknerd.stores.jp/）でも購入可　＊本文中太字の箇所が本書からの引用です

おいしいもんには理由（わけ）がある

第56回

文＝土井善晴
Doi Yoshiharu
写真＝岡本 寿
Okamoto Hisashi

須佐駅近くの海鮮料理店「梅乃葉」では、活ウニを割って出してくれる。写真の黒ウニ（ムラサキウニ）は濃厚で強いうま味が感じられる

三方を海に囲まれた水産県・山口県のウニは、コクがあり、シルキーな口当たり

磯香る夏ウニ

《山口県萩市》

萩市須佐に到着後、まずは須佐湾にある「須佐ホルンフェルス」へ。黒と灰白色が織りなす縞模様の地層が露出しており、「日本の地質百選」にも選ばれた、学術的価値の高いダイナミックな名勝だ。約1500万年前、海底に堆積した地層がマグマの熱変成作用で変成岩になったもので、その不思議な景観に圧倒される土井さん

どい よしはる／1957年、大阪府生まれ。料理研究家、十文字学園女子大学特別教授。NHK「きょうの料理」に出演。『一汁一菜でよいという提案』(新潮社)など著書多数

今回は、この連載の旅では初めて訪れる山口県。山口県と言えば下関のふぐを思う私ですが、赤ウニという極上のウニがあると知り、萩市須佐を訪ねました。

須佐は山口県北東部にあり、萩駅から海岸沿いに東へ約37キロ。須佐という地名は、神話の時代の「須佐之男命が出雲の国から朝鮮半島に渡る際、神山（須佐にある高山）の峰に立って航路を定めた」ことに由来するそうです。

須佐湾は「西の松島」と呼ばれ、国の名勝、北長門海岸国定公園にある複雑で険しい岩礁と穏やかな入り江が連なる変化に富んだ景観。こういう海はたいてい魚の棲家になるものです。河川から運ばれる植物プランクトン（原生生物）を海の動物プランクトンが餌にして大繁殖する。すると、これを餌にする魚貝が集まる。いのちが連鎖する須佐は、古くから好漁場として知られています。須佐ホルンフェルス*のある海岸にも、釣り人がいました。

須佐のポテンシャルに驚き！

「ひととき」取材班、道中で直売所を見つけると、その土地の産物や暮らしが知りたくて、時間が許せば立ち寄り、都会にはない鮮度の高い野菜や素朴な乾物を見つけては、思わず明日のおかずに買うのです。

須佐地域では、とくに魚介の物販が充実していました。びっくりしたのはその値段。約700グラムの天然真鯛が1尾300円、イキレ（小イカ）が10杯以上入って1パック150円、手のひら大のカライサキ100円、ワカナ（ブリの子）が800円、大物のヒラマサ、メジナは4500円とありました。ねっ、ここにいたら毎日おいしい魚が食べられるでしょう。

さて、山陰本線須佐駅に到着。JR西日本の豪華列車「TWILIGHT EXPRESS 瑞風」（山陰コース）が、この小さな須佐駅に停車します。目的は、新鮮な透明のイカが食べられる朝ごはん。イカは、一本釣りの剣先。わけても特別ていねいに扱われた地元ブランドの「須佐 男命いか」

青い須佐湾に突き出た須佐ホルンフェルスを遠くから望むと、断崖絶壁のようだが、直下まで遊歩道を降りていくと、岩肌に触れることもできる

*「ホルンフェルス」とは、岩石が何らかの変成作用を受けた「変成岩」の一分類